

野球観戦が教えてくれる東京

夏休みに、父と東京ドームへプロ野球の試合を観に行った。なぜなら私は野球観戦が大好きだからだ。応援席から両チームのファンが一丸となって選手たちを応援する姿は何度見ても圧巻の光景だ。ただ、今回の野球観戦で特に印象に残ったのは、沢山の外国人が観戦に来ていたことだ。彼らはプロ野球特有の応援歌を日本語で一生懸命に歌っていた。また、日本語だけでなく他の言語も飛び交い、東京ドームがまるでアメリカの野球スタジアムの様に感じた。私がそれに驚いていると、飲食店のメニュー表の前で日本語が読めずにご飯が注文できない外国人を見かけた。

私は、この野球観戦で「東京」がグローバルな都市として成長しているが、まだまだ課題も残されていること

を実感した。

家に帰り「東京」と外国人の関係について調べてみた。すると、インバウンド観光という言葉があることを知った。インバウンドとは、外国人が訪れてくる旅行のことを意味するそうだ。インバウンド観光は東京、そして日本に大きな経済効果をもたらすそうでコロナ禍の二〇二〇年から二〇二一年では消費効果が三七八パーセント上がっているらしい。

しかし、インバウンド観光には言語や文化の違いで外国人がマナーが分からずマナー違反をしてしまい風紀が悪化してしまう問題もある。これを解決していくためにはまず、言語の壁を低くしていくことが重要だと思う。

電車の中の電光掲示板などは日本語、英語、中国語な

ど様々な言語で行き先が表示されている。街中にも多言語で地名やマナーが表示されているものを増やしていくことが言語の壁を低くする良い策だろう。だが、中学生の私には看板を街中に建てることは難しい。そこで私は、誰でもすぐにできることは外国人とコミュニケーションをとることだと考えた。難しいと思ってしまうかもしれないが、意外と中学校で習った英語でも通用するのだ。

以前、学校行事で英語を使い生活をする体験ができる施設を訪れた。その時、一生懸命に自分の言いたいことを伝えようとすれば、相手には必ず伝わると分かった。

言語の壁は今まで私たちが低くしていくのは難しいと思っただけで少しの勇気だけで低くすることができると実感した。

次に重要なことは、相手の文化を理解することだと思う。例えば、日本人はタトゥーを入れる人は少ないが外国では多くの人が入れている。このタトゥーを入れているか入っていないかの違いは日本と外国の文化の差である。

日本の温泉やプールには「タトゥーを入れている人はお断りさせていただきます。」といった張り紙がよく貼

られている。確かにタトゥーを怖いと思ってしまう人もいるだろうが、タトゥーを入れているからといってその人が怖いなんて言えない。それはただの印象に過ぎないと思う。

野球観戦の際、外国人が日本の応援歌を歌う文化に積極的に参加していた。つまり、彼らは自分の国と異なる文化を尊重し理解しようと努めていたのだ。この行動から私たちが学ぶ点は多いと思う。私たちも外国の国々の文化を尊重し、理解していくべきなのではないか。文化を尊重し受け入れる上で手助けすることが重要だと思う。

一人一人が言語の壁や異なる文化や背景を持つ人々と共生して受け入れることを考える。そうすることで人々が共に楽しむことができる都市「東京」が進化しているのだと思う。

あの日の野球観戦は、私に「東京」の変化を教えてください。そして「未来の東京」を生きていくために私にできることのヒントを与えてくれたのだ。

今度野球観戦に行く時は野球を楽しむのはもちろんのこと、日本人、外国人関係なく一丸となって選手を応援する姿も楽しみにしたい。



心の壁を乗り越えて

「未来の東京」はどうなっているだろうか。私は「未来の東京」を、一人一人が大切にされ自分らしく生きられる、誰にとっても暮らしやすい社会にしていきたい。小さな赤ちゃんから高齢者、外国の方、障がいを持つ方など全ての人々にとって暮らしやすい東京を築きあげていきたいと考える。

今年の夏はパリオリンピック・パラリンピックが開催された。各競技の迫力あふれるシーンに興奮した人も多いだろう。私もその一人だが、その後のパラリンピックでも、ハンディキャップを乗り越え、熱く競技に挑む姿に感動した。私たちの日常においても、障がいを持つ人との関わりはある。私の家の近くには、障がいを持つ方の作業施設がある。そこに通う方とすれ違う時、手を振

られることがよくある。私は「おはようございます。」「こんにちは。」などと挨拶を返している。街中では、エレベーターを待っている際、車椅子の方と一緒に乗り、ボタンを押す等のちょっとした手伝いをしたこともある。少し混雑した駅で白杖を持った方を見かけたこともあったが、その時は危ないかも…と思いつつもどうしたらいいか分からず、何もできないまま通り過ぎてしまった。

近年、「バリアフリー」「ユニバーサルデザイン」という言葉を聞く機会も多くある。「バリアフリー」とは、生活の中で不便を感じることを、様々な活動をしようにする時に障壁になっているバリアをなくすという考え方。「ユニバーサルデザイン」とは、あらかじめ多様な人々が利用しやすいよう都市や生活環境をデザインする考え方

をいう。誰にとっても快適な社会を創るには、バリアフリーやユニバーサルデザインの考えに基づいて環境や生活の質を整えていくことはもちろん大切なことであるが、最も重要視しなければならないことは、私たち一人

持つ方との関わりでここまで考えてきたが、これは高齢者や外国の方に対してでもいいえると思う。困っている様子や困難な様子が見受けられた時、躊躇なく手を差し伸べられることが求められるのではないだろうか。

一人が自分の意識や気持ちのバリアを乗り越えることなのではないかと考える。先に挙げた障がいを持つ方との私の関わりについて考えてみる。挨拶をしたり、乗り合わせた相手のためにエレベーターのボタンを押すという行動は、日常の中で当たり前の関わりといえるが、白杖を持つ方にどうしたらいいか分からないというのは、自分の中で意識はしないまでも「自分とは違う」「何か特別なことをしなければいけない」といった思いが働いているのではないだろうか。友達や知り合いが困っているなら当然声をかける。学校内では、見知らぬ人であっても困っていそうであれば「大丈夫ですか。」と声をかけることができる。これと同じように、障がいを持っている人に対して、何か困っている様子が感じ取れるなら、「大丈夫ですか。」「何かお手伝いしましょうか。」などと自然に声をかけることが普通であり、それこそが気持ちのバリアを乗り越えた状態なのではないだろうか。障がいを

私たちは、どんな人であっても自分一人で生きていくことはできない。誰もが尊重され、その人らしくよく良く生きていくためには、どこかで他者からの助けや支えが必要であろう。その助けや支えが、多様な人々と力を合わせ、暮らしやすい社会を創っていくことに繋がるのだと思う。そのために私は今、何ができるだろうか。まず周囲の人に関心を持ち、助けや支えが必要だと感じられた際には、声をかけるなどのコミュニケーションを図れるよう努力したい。また、立場を変えて考えてみることも必要だと考える。私には何ともないことが、違う立場にある人にとっては問題かもしれない。視点を変えて物事を考えてみることも心がけたい。私にできることから始めて、未来の東京をより良いものにしていきたい。



「自然豊かな東京に」

僕は「東京」と聞くと、高層ビルなどの建物がたくさんあり、機械にあふれている都心をイメージします。公共交通機関などが発達していて大変便利です。しかし都心は、都内の郊外に比べて、自然が少ないと感じます。自然があると、心が落ち着きます。僕も勉強などで疲れた時は、近くの公園に行ってリラックスしています。都心で働く人にとってもそういった環境が身近にある方が、生活しやすいと思います。だから、僕は未来の東京にもっと自然を増やしたいです。

自然を増やすためにできることは、いくつかあります。

一つ目は、建物の緑化です。都心はコンクリートが多く、植物を植えづらいです。だから、道路ではなく建物

の屋上や壁面を緑化します。これには憩いの場となるだけでなく、熱をさえぎり暑さを和らげる効果もあります。これをオフィスの屋上に設ければ、働いている人たちをリラックスさせることができます。また、緑化の中でも「緑のカーテン」は少ない材料で簡単に植物を育てられるので、始めやすいと思います。

二つ目は、植栽活動です。僕の周りにも、公園などに植林をする団体があります。それにボランティアとして参加し、少しでも多く緑を増やします。また、植物が生きやすい環境を作ること大切です。水やりや地域の掃除などが例に挙げられます。これらは、僕ができることなので、積極的に参加したいです。

三つ目は、街路樹を増やすことです。街路樹は、日差

しをさえぎったり、騒音を和らげたりする効果があります。電車や工事の音をよく耳にする都心の人たちにとって、その音を和らげることは良い癒しとなるでしょう。そのために僕ができることは、植樹のボランティアや緑の募金です。これらの活動により、東京都内の街路樹数は百万本を超えました。植樹はまだしたことがないので、やってみようと思います。

このように、自然を増やす取り組みはいろいろあります。これらの方法で、東京を自然にあふれリラックスして過ごせる場所にしたいです。しかし、いずれも大勢が協力して活動しなければ達成することはできません。つまり、個々の意識が大切なのです。僕も、「今を変えてもっと良くしたい」という思いでボランティアをしています。そうすると活動が楽しくなるし、やりがいも出てきます。このようなみんなの思いが、より良い未来を作っていくのではないでしょうか。



「全ての人を災害から守れる東京を作ろう」

それは強烈な体験だった。今年の一月一日新潟県に家族旅行した際、能登半島地震が発生した。大きな揺れでホテルのエレベーターが止まり、建物が全壊するのではないか、という身の危険を感じた。生まれて初めての経験で地震の大きさ、被害の大きさ、被災地の人々の苦しみを身をもって感じた。その時ラウンジの横のテーブルに、全く日本語や英語の通じない家族がいたが、彼らの顔面は蒼白で恐怖のどん底のように見えた。おそらく地震などほとんどない国の人々なのだろう。楽しみにしていた日本での正月なのに、大地震に遭遇してさぞかし心細く、怖い思いをしたに違いない。その家族の中の泣いていた三才位の女の子にお菓子をあげると、驚くと同時に泣き止んでくれた。言葉の通じない異国の地で災害

など不測の事態に遭遇して、その現地の人に優しく接してもらえ、援助を受けることが出来たので、とても有難かったのだろう。

もし、この能登半島地震クラスの地震が東京に起きていたら、どうなっていただろう。最近起きた宮崎県での地震と、それに伴う南海トラフ関連の大地震の予測等を考えると、東京直下型の大地震はよりさし迫っていると思う。その際のシュミレーションでは、被災者や帰宅困難者の数、建物や鉄道のダメージ等は計り知れないと言われている。将来の東京の健全な発展を望むなら、まず地震を含めた災害対策が必須だ。そのためには地震やその他の災害を想定して、日々準備を怠ってはならないと思う。「天災は、忘れた頃にやって来る。」と言ったのは、

物理学者で哲学者の寺田寅彦だが、私たちは日頃から身の守り方、被災時の避難の仕方、家族と離れ離れになった時の待ち合わせ場所の確認、安全な通学路や通勤ルート確保、非常用の水・食糧の確保などについて自分たちで常に真剣に考えておくべきだ。

この際同時に忘れてはならないのが、東京で暮らす日本人だけでなく、年間百万人を超える外国からの観光客に対する、手厚い保護と迅速、かつ十分な救援ではないかと思う。

今や日本は、世界中の人々にとって「最も行ってみた国」の一つで、いわゆるインバウンドとして世界各国から日本を訪れる人が激増している。それは、日本が安全で治安が良く、街が清潔かつ衛生的で、食事も美味しく「おもてなし」の心が浸透しているからだと思う。しかし人類が制御できないのが、天災、特に地震だ。日本への観光客の多くは東京を一度は訪れるが、そこで被災したらどうなるか。東京で生活している人でさえ大変なのに、観光客にも十分に対応できるのか。宿泊施設がダメージを受け、空港も使用できないため帰国もできず、途中病気になっても医療機関へ十分にアクセスできず、言葉も通じない。宗教上食べられない食材もあるだろ

う。これらの人々も必ず救う準備をして初めて、安心して東京に来てもらえるようになるだろう。

また、車イスの人、視覚や聴覚に障害のある人などに対しての災害時の配慮も必要不可欠だろう。能登半島地震の時に実際目の当たりにしたのは、二日間に渡りエレベーターが使えない光景だった。重い車イスを階段で運ぶことはできず、視覚障害のある人に高層階まで自力で移動してもらったのは、本当に危険だった。

そこで私個人として、何ができるか考えてみた。議員や政治家でもない私が、東京全体の整備をすることは到底できないが、一個人として準備をして、周りにその輪を広げていくことは十分可能だ。具体的には、複数の外国語や宗教の勉強をして、外国からの観光客がピンチになった時、言葉で助け、宗教的な慣習でも不都合な点をなくしてあげれば、どれだけ外国客の人々の役に立てるだろう。また、点字や手話もマスターしておこうと思う。都民一人一人が、外国から来た人やハンディキャップを持つ人も災害時に積極的に救う心構えをしておくことが、将来の安全な東京を作るのに最も重要だ、と私は強く確信する。

この地から未来の東京へ

「自然豊かで歴史薫る街」。多くの人が「東京」と聞いて思い浮かべる風景とは程遠いだろう。私の住む国分寺。街を少し歩けば、武蔵国分寺や七重塔などの様々な史跡。また少し歩けば、木々が生い茂り、四季折々の景色を見せてくれる武蔵国分寺公園や、「名水百選」、「東京の名湧水五七選」に選ばれているお鷹の道、真姿の池湧水群などがある。そのような、自然と歴史あるこの街で育つのは、私達、人間だけではない。この「地」で、この「自然」の中で育つものがある。

私の学年では、SDGsをテーマとしたプロジェクト学習を行っている。私のグループでは、規格外野菜の活用や地産地消について調べており、今年六月、市内の農家の方とお話をさせていただく機会があった。規格外野

菜や、国分寺市の農業などについて、幅広く話していただいたが、中でも強く印象に残ったのは、「こくベジ」についてだ。こくベジとは、国分寺市内で育った農畜産物のことである。江戸時代の新田開発がきっかけで盛んになった国分寺の農業。それらの歴史と国分寺の自然の豊かさが最大限につまった、まさに国分寺の集大成と言えるものである。この「地」で、この「自然」の中で育つこくベジという市の魅力を、より多くの人に伝えていきたいと、私のグループでは考えた。

ただ一つ、気になることがあった。「あっちの方も段々農園が減ってきてるしなあ。うちも最近是人手が足りなくて、なかなか畑全体に手が回らないよ。」

という、農家の方の何気ない一言だ。これこそが生の声であり、国分寺市の、そして東京都の現状だろう。後日、調べてみたが、現在の日本の農業の課題はやはり、農家の高齢化や後継者不足だ。また、それらが引き起こす耕地面積の減少も深刻だ。国分寺市で言えば、平成二十七年時点では約一五四・五haだった耕地面積が、令和四年には一二九haとなっている。東京都全体で見ても同様に、減少が続いている。このまま耕地面積の減少が続けば、国分寺の農業やこくベジといった魅力は、失われてしまうのだろうか。

「この現状を知った私達は何をすべきか。」と考えながら、今日もプロジェクト学習を始めた。まずは、より多くの人に現状を知ってもらうことが大切だと考え、私のグループでは、このプロジェクト学習を通して学んだことを模造紙にまとめ、近くの小学校で掲示してもらうことになった。この一〇月に控えた、校内でのプロジェクト学習発表会では、他のテーマを扱っている人達にも、前述した課題や現状を自分事として捉えてもらえるよう、学習を更に深め、説得力のある発表をしたい。

また、個人としては、近隣の農家の方を応援するとい

う点から、地産地消を意識した買い物心がけていきたい。そして、今すぐにとは言えないものの、今後は援農ボランティアなどの、直接的に農家の方を応援することのできる活動にも参加してみたいと考えている。国分寺や、東京という街への愛を行動に変えて。

「高層ビルや様々な店が立ち並び、多くの人が行きかう街こそ東京」という印象を持つ人は多いだろう。しかし、そのような東京にも、自然豊かな街がある。その自然から生まれるものがある。この、正反対な魅力を併せ持つことが、真の東京の良さだろう。バランスのとれた街だからこそその良さを、更に磨いて、未来の東京へと引き継ぎたい。

たとえ、小さなことだとしても、身近なところだけだとしても、その「行動」こそが、明日の東京を、そして、未来の東京を変える一歩になるのだ。